

---

---

## 原著論文

---

---

# 介護実習における学生の学びと記録について —介護実習日誌の調査から—

吉川 直人

## About student learning and records in nursing practice From a survey of nursing practice records

Naoto Yoshikawa

Recording is an important task for care workers. Nursing practice is an opportunity to learn recording techniques by creating a diary. The purpose of this study was to explore and analyze the practical diary, where the trainees recorded their experiences in the practical training and how they recorded what they learned. The analysis of words in the training diary for each training type suggested that the trainees' viewpoints changed according to the training goals and objectives, and that they learned nursing through a series of processes.

Key words: Nursing practice, Training diary, Frequent words

### I. はじめに

介護福祉士養成カリキュラムにおいて、介護実習は450時間の実習が義務付けられている<sup>1)</sup>(保育士養成施設等卒1年課程においては210時間)介護実習は実習Iと実習IIに分類される。加えて、義務ではないが養成校により2日～1週間程度、訪問介護実習を課している。実習Iにおいては、実習施設・事業等の実際を体験し、施設等の機能や基本的なケアを学ぶ。実習IIにおいては、介護過程の展開として、根拠に基づいた介護実践のプロセスを、利用者を受け持ち実践する課題が課される。訪問介護実習においては、訪問介護職員と同行訪問を行い、訪問介護実習を展開する。実習I・II・訪問介護実習、全ての段階において実習日誌の作成を行っている。

介護福祉士にとって記録作成は重要な業務である。実施した介護サービスを記述した記録が、ケアの証明となる。また記録はチームケアを提供する際に共有の情報となる。介護実習日誌の作成は介護記録の基本であり、日々の実習における実践、学び、振り返りを書くという練習を通して介護業務に必要な記述力を身につける。介護実習は1日8時間程度の実習における実践を、介護実習日誌にまとめることで記録技術を学ぶ機会となる。実習日

誌には、学生は実習において実施したケアや学び、利用者とのかかわり、職員からの指導内容を記録する。

本研究は、実習生が実習における体験を記録する際にどこに視点を置き、学んだ内容をどのように記録しているのか、実習日誌を探索的に分析し、明らかにすることを目的とした。

### II. 方法

実習施設及び養成校での実習指導の展開は、介護実習の学びの言語化を行う日誌の内容に大きく影響する。実習指導において、評価スケールの工夫による指導方法を行っている施設も存在する<sup>2)</sup>。実習指導者は、技術記録においても迷いを抱えながら指導を展開している<sup>3)</sup>。指導者のみでなく実習生に関わる職員の指導は日誌に影響を与える<sup>4)</sup>。第一段階の実習日誌の分析から介護実習における実践には、事前指導の重要性が指摘されている<sup>5)</sup>。これらの先行研究に共通していることは、実習日誌の重要性の認識と、実習における実践を適切に日誌に記録するための指導に対する模索である。実習における記録の充実及び指導の展開のためには、実習日誌における日誌の内容、傾向を把握する必要がある。

そのため、本稿は、実習日誌の記録内容に焦点をあて、実習の目標、実習において実践した内容が、記録にはどのように表れるのか等を調査した。

## 1. 調査対象

介護福祉士養成校において介護実習を行った学生8人を対象に、実習日誌の調査を依頼した。調査の趣旨、目的、個人情報保護等を説明し同意を得た学生の日誌のみ調査の対象とした。今回の研究では8人の日誌を対象とする。

## 2. 分析方法

分析対象として、2018年に介護実習を行った介護実習生8人の実習日誌から収集したテキストデータを、テキストマイニングソフト KH Coder を用いて語の抽出や分析、解析を行った。抽出語リストの表をもとにして比較検討を行い、各語句の関連を明らかにするために、共起ネットワークによる分析と階層的クラスタ分析を行った。

## 3. 倫理的配慮

調査対象者には、本研究以外での目的には使用しないこと、集計されたデータは厳重に取り扱い、個人が特定されないことを明記し、同意書を取り交わした。

また、実習日誌はテキストデータとしてコンピューターで処理し、個人、施設、事業所が特定できないデータに処理して本研究に用いた。

## 4. データの準備

分析対象は、介護実習生8人の記録のうち、実習Ⅱ（介護老人福祉施設での実習）、訪問介護実習における記録を解析対象のテキストデータにした。訪問介護実習は、実習2日間のうち、2日分をテキストデータとした。介護実習Ⅱは実習15日間のうち、ランダムに選んだ4日分をテキストデータとした。

調査対象とした養成校における実習Ⅱの目標は「個別介護過程展開の実際を学ぶ」である。介護実習における介護過程の展開は、対象利用者を決め、アセスメント、ニーズ把握、計画立案、実施、評価という一連のサイクルの実施である。訪問介護実習の目標は「在宅高齢者と家族の生活状況を把握し、在宅介護のあり方を学ぶ」「介護保険制度における訪問介護を理解する」「社会資源の活用、他職種との連携について知る」である。

## 5. 介護実習日誌の内容

本研究の分析に用いる実習日誌の形式として、表面上部に実習生氏名、日付、天候、開始時間、終了時間、配属場所、指導者名欄がある。その下に本日の目標欄、実習内容、利用者の様子欄がある。裏面に、実習の振り返り、指導者コメント欄がある。振り返りには、実習記録の項目は状況と考察、目標の達成度、疑問、反省を記載する。

実習生は、実習時の記録時間等に記録を行い、実習指導者へ提出してコメントでアドバイスや指導、質問への

返答をいただいている。本稿では、学生の記述のみを分析対象として取り扱った。

調査対象とした介護福祉士養成校では、3つの種別の実習において介護実習日誌の作成があり実習日誌の様式は同一である。

## Ⅲ. 結果

実習生が、実習における実践において印象に残り視点を置いたところ、また実習の学びから得た、気づきや学びを日誌の振り返り欄（以下振り返り）に記述した内容を分析した。実習Ⅱにおける8人の実習生の振り返りの総文章数は749文で総抽出語26008語である。訪問介護実習においては395文で総抽出語は12628語である。このうち振り返りで使用されている言葉の特徴をとらえるため、名詞、サ変名詞、形容動詞、動詞を解析の対象とした。

### 1. 頻出語の分析

振り返りにおいて多く用いられていた語の上位20語を抽出した結果を表1・2に示す

#### 1) 名詞の頻出語

実習Ⅱと訪問介護実習において、「介助」と「職員」は近い頻度で出現している。それ以降は、実習Ⅱにおいては「様子」「リハビリ」「表情」と続き、訪問介護実習においては「コミュニケーション」「自宅」「身体」と続いている。訪問介護実習では「家族」「家庭」と在宅における介護の特徴を表す用語が見受けられる。

#### 2) 「サ変名詞」の頻出語

実習Ⅱにおいては「担当」「計画」といった介護過程の展開に関連する用語及び「食事」「入浴」「排泄」といった生活行為、身体介助に関連する語句が頻出している。訪問介護実習においては、「掃除」「通院」「買い物」といった訪問介護に特徴的な用語が頻出している。

#### 3) 形容動詞の頻出語

実習Ⅱと訪問介護実習では、上位3語において順番は異なるものの「必要」「大切」「重要」の用語が使われている。双方の否定的なキーワードを確認すると実習Ⅱでは「不安」「危険」「困難」、訪問介護実習では「不安」「不快」「不安定」の語句が見られた。

#### 4) 動詞の頻出語

双方ともに「思う」「行う」「見る」「感じる」「学ぶ」といった語句が上位に見られた。

### 2. クラスタ分析

集計単位は段落、最小出現数は実習Ⅱ25、訪問介護実習20に設定し、名詞、サ変名詞、形容動詞、動詞、形容詞、感動詞、副詞を対象にクラスタ分析を行った。

表1 介護実習Ⅱ 頻出語

名詞	出現回数	サ変名詞	出現回数	形容動詞	出現回数	動詞	出現回数
介助	124	利用	470	大切	39	思う	149
職員	81	実習	61	必要	24	行う	112
様子	61	介護	56	重要	21	見る	93
リハビリ	46	担当	48	不安	12	感じる	75
表情	40	食事	37	様々	11	学ぶ	51
身体	38	確認	35	好き	10	言う	43
自分	29	入浴	35	スムーズ	9	食べる	36
名前	29	活動	32	可能	8	聞く	34
オムツ	25	観察	30	貴重	8	知る	33
ボール	23	計画	30	大丈夫	7	違う	23
状態	22	一緒	29	危険	6	考える	22
本人	22	交換	29	清潔	6	伝える	21
言葉	19	排泄	29	迅速	5	行く	20
笑顔	17	お話	26	丁寧	5	出来る	20
情報	17	経験	26	きれい	4	使う	19
体調	17	認知	24	困難	4	転がす	17
トイレ	16	実践	22	上手	4	関わる	16
場面	14	対応	19	新た	4	呼ぶ	16
イス	13	話	19	無理	4	分かる	16
コミュニケーション	13	工夫	18	こまめ	3	教える	15

表2 訪問介護実習 頻出語

名詞	出現回数	サ変名詞	出現回数	形容動詞	出現回数	動詞	出現回数
介助	45	利用	250	必要	55	行う	95
職員	38	介護	105	大切	27	思う	78
コミュニケーション	34	訪問	92	重要	12	学ぶ	49
自宅	21	援助	54	不安	8	感じる	45
身体	21	掃除	52	好き	6	知る	27
家族	17	生活	51	丁寧	6	見る	26
業務	15	支援	38	非常	6	振り返る	18
お宅	14	実習	35	スムーズ	5	使う	14
場所	14	通院	22	安全	5	話す	14
目標	14	確認	20	不快	4	聞く	13
様子	14	買い物	18	様々	4	行く	12
ヘルパー	13	理解	18	疑問	3	付ける	11
家庭	12	外出	16	十分	3	考える	10
自分	12	サービス	15	勝手	3	違う	8
笑顔	12	在宅	15	不安定	3	伺う	8
本人	12	関係	14	明確	3	伝える	8
情報	11	一緒	13	さまざま	2	決める	7
ケア	10	会話	13	可能	2	言う	7
体調	10	施設	12	確か	2	取る	7
技術	9	信頼	12	完璧	2	待つ	6

クラスター化にはWard法を用い、距離はJaccardを採用した。クラスター数は、実習Ⅱは8、訪問介護実習は5に設定している。デンドログラムを図1、図2に示す。

実習Ⅱのクラスターを分析する。クラスター1は、「活動」「担当」「介護」「計画」といった介護課程の展開に関連する語、クラスター2は「名前」「一緒」「楽しい」

「リハビリ」「お話」といったリハビリテーションに関連する語が集まった。クラスター3は「入浴」「身体」「機能」と入浴介助に関連する語、クラスター4は「オムツ」「交換」「観察」「排泄」と排泄介助に関連する語、クラスター5は「食事」「食べる」と食事介助に関連する語が集まった。クラスター6は「表情」「様子」「見る」「実習」「経験」

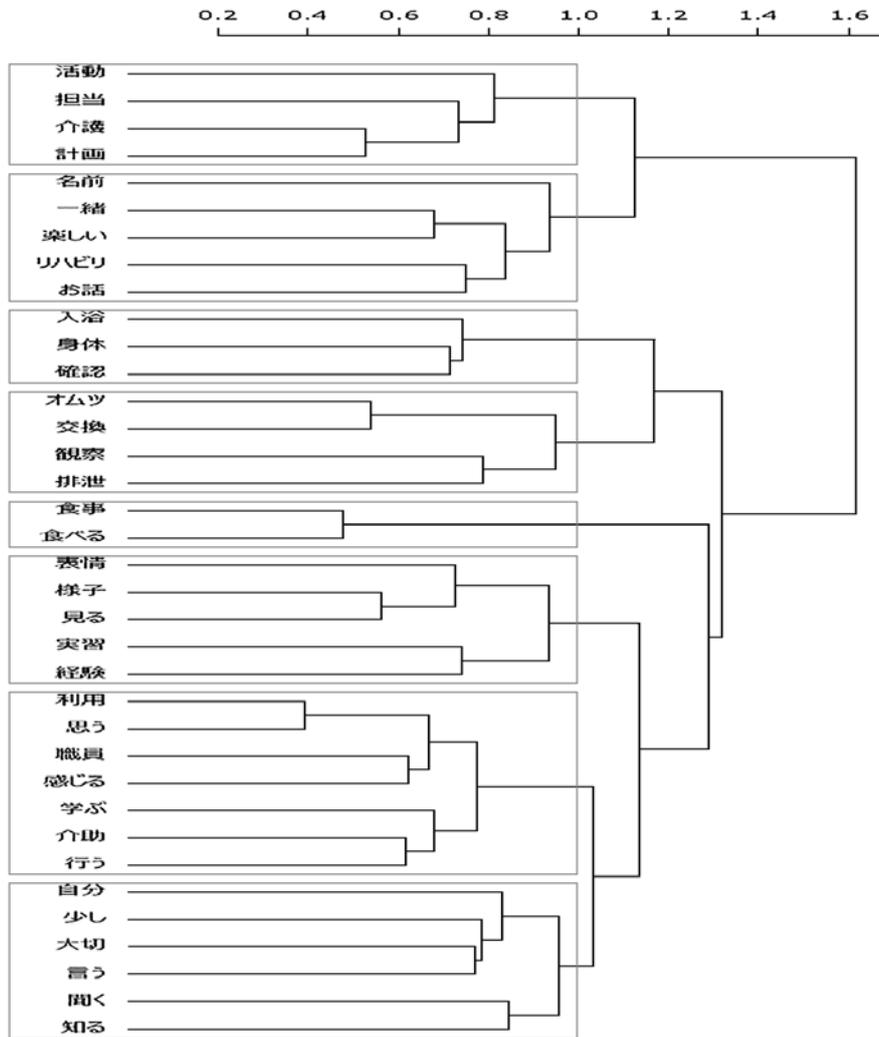


図1 実習II デンドログラム

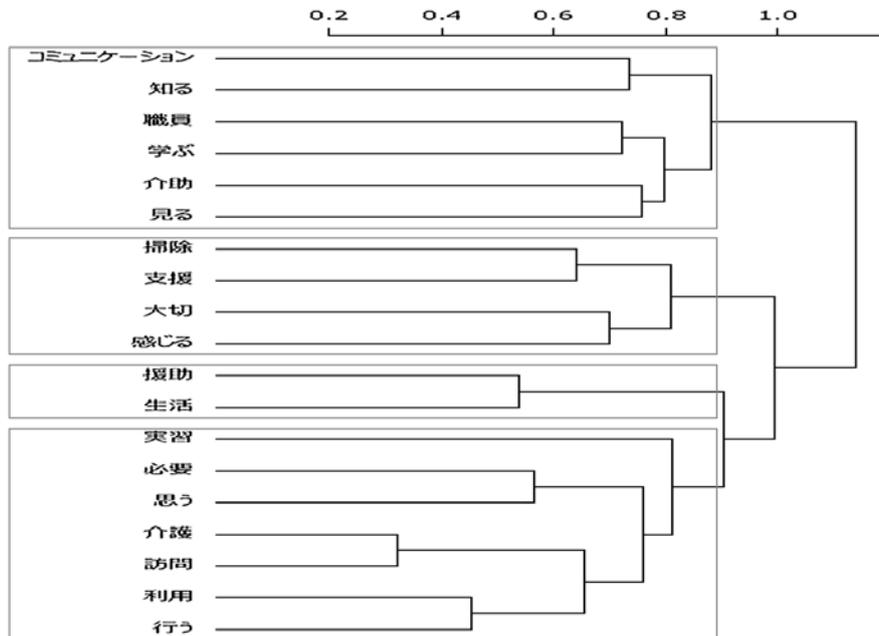


図2 訪問介護実習 デンドログラム

と利用者の観察, クラスタ7は「利用」「思う」「職員」「感じる」「学ぶ」「介助」「行う」, クラスタ8は「自分」「少し」「大切」「言う」「聞く」「知る」と実践における学びと内省的な学びに関連する語が集まった。

利用者の観察, 介護過程の展開, リハビリテーションの見学, 観察, 身体介助の実践と学びを行い, 内省的な振り返りを行っていることを日誌に表していることが示唆された。

訪問介護実習Ⅱのクラスターとして, クラスタ1は「自宅」「知る」と訪問介護における基本的な語, クラスタ2は「介助」「通院」「職員」「学ぶ」「コミュニケーション」「見る」とした訪問による学びをあらわす語。クラスタ3「確認」「掃除」「支援」「大切」「感じる」と生活支援を表す語, クラスタ4は「身体」「援助」「生活」と訪問介護における実践の語, クラスタ5は「実習」「必要」「思う」「介護」「訪問」「利用」「行う」とした実践と内省的な学びである。

訪問介護実習における実践は, 日数の短さもあり, かつ施設実習以上に時間の制約, 実習生に指導できる職員の制約が存在する。実践の内容も限られているため, 「自

宅」「通院」「掃除」といった実践や見学を行い, 内省的な振り返りを行っていることを日誌に表していることが示唆された。

### 3. 共起ネットワーク分析

頻出語がどのような語と関連して使われているかを調べるため, 共起ネットワーク分析を行った。結果を示したのが図3・4である。分析対象となる語は, 最少出現数25, 最小文書数1に調整した。強い共起関係にあるものは太い線で描画し, 最小スパンニング・ツリーだけを描画した。

実習Ⅱについては, 7つのネットワークができています。  
 ①利用-言う-大切-感じる-実習-思う-少し-職員  
 ②介助-学ぶ-排泄-確認-身体-入浴  
 ③活動-計画-介護-担当  
 ④観察-交換-オムツ  
 ⑤楽しい-一緒-リハビリ  
 ⑥見る-様子-表情  
 ⑦食事-食べる

訪問介護実習については, 4つのネットワークができています。  
 ①知る-必要-介助-コミュニケーション-思う-大切  
 ②学ぶ-利用-職員-行う  
 ③介護-実習-感じる-訪問  
 ④支援-掃除-生活-援助である。

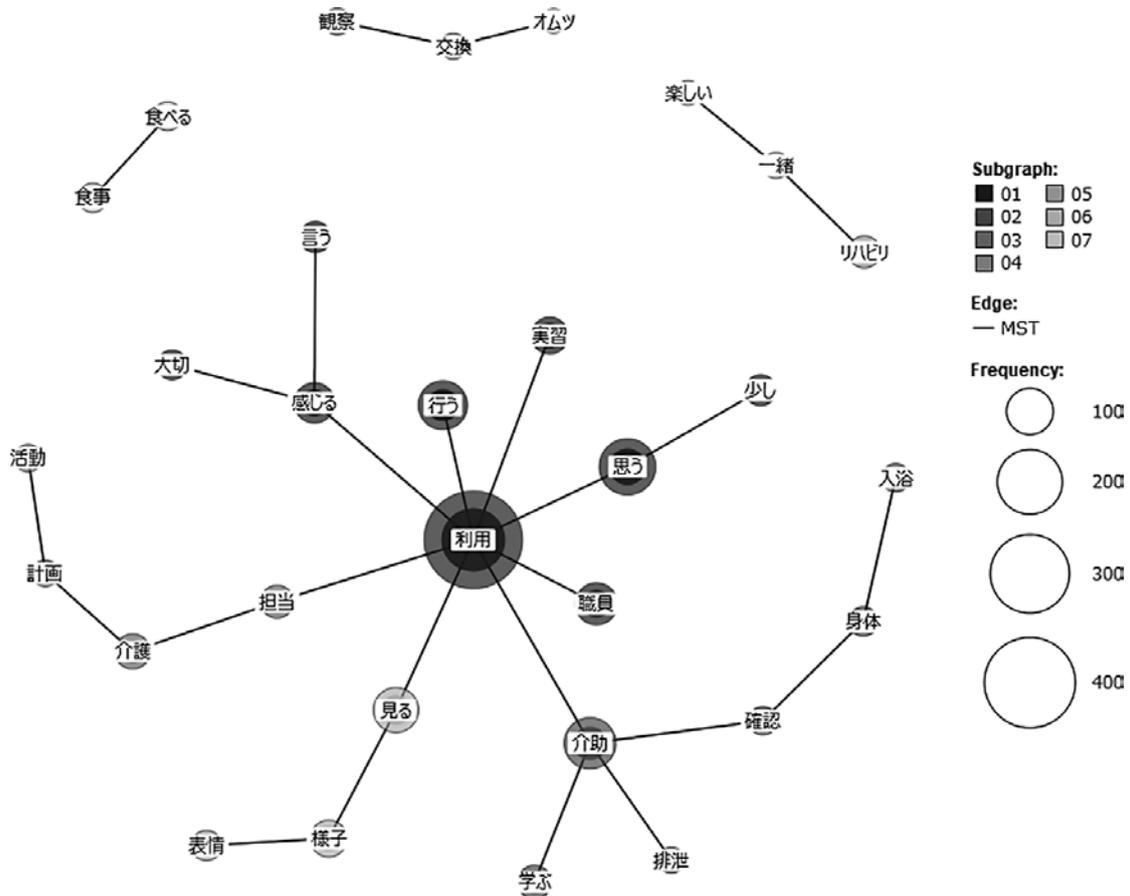


図3 実習Ⅱ 共起ネットワーク

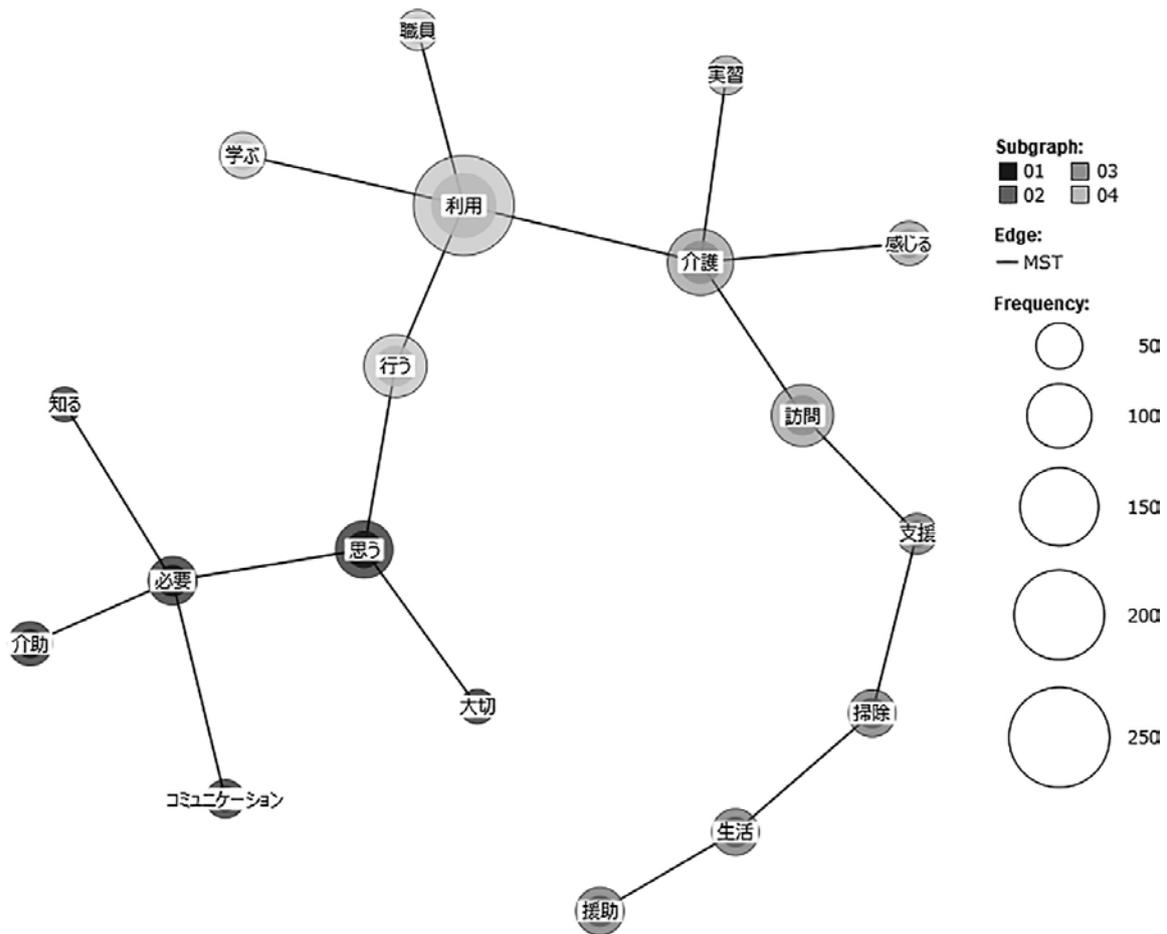


図4 訪問介護実習 共起ネットワーク

#### IV. 考察

実習日誌の作成において、学生は具体的な記述と考察に苦手意識を抱えている<sup>6)</sup>。日誌は実践の振り返り及びスーパービジョンの検討材料になるため重要である<sup>7)</sup>。そのため養成校において様々な形で記録作成の指導を行っている<sup>6)</sup>。しかし、学生の表現力・時間・語彙等の課題が存在し感想にとどまり考察まで達していない問題がある<sup>8)</sup>。日誌の振り返りは実習において行ったことで疑問、重要な点、助言をもらいたいこと、学びを定着させたいこと等を記述する等、複数の目的において使用される。名詞、サ変名詞においては実践や観察、見学したことから印象に残った事が頻出される。形容動詞である「大切」「必要」「重要」は、実践と学びにおける定着させたいこと、強調したいことを記録に留めるために使用されている。頻出動詞として「行う」「言う」「聞く」「見る」といった実践を表す語、「思う」「感じる」「考える」といった内省的な学びを表す語が見られた。これらの語は、実習における実践により学び、振り返りに関して内省的に

考察するという一連の流れを日誌に表していることが示された。実習の総まとめであり介護実践を多く行う実習Ⅱにおいては、入浴、食事、排泄といった介助の実践と介護過程の展開を行い、観察と実践、内省の一連の過程を通して、介護を学び、日誌に表している。訪問介護実習は、「掃除」「通院」「買い物」といった生活援助の一部と「コミュニケーション」を行い、「見る」「知る」「学ぶ」といった流れにより実習を展開していることを日誌に表している。

今回の研究において、実習種別ごとの実習日誌の語句の分析を行った結果、以下の知見を得た。

1 実習生の視点は、実習目標及びねらいに沿って変化しており、一連の過程を通して介護を学んでいることが示唆された。

2 実習における実践等により印象に残ったことを、肯定的語句や否定的語句を使用し、強調したい点や内省の場面が分かるように記録している。

実習日誌は感想文ではなく、考察まで行うことで実習の効果がより深くなる。実習生は、実習内容に沿った内

容を記し、知識、経験として定着したいことを強調して日誌に記録する傾向が明らかにされた。実習指導者及び教員が、実習指導において、日誌の中で強調している点や内省している点を確認し、実習段階・目標に沿った留意点等を指し示すことで、より質の高い記録及び日誌の活用が行えると考えられる。

## V. まとめ

頻出語やクラスター分析、共起ネットワークの傾向から、実習で起こる出来事を実習生が記述する傾向が示された。しかし、語句は記述の際に自己の行動や言動を表す場合、他者の行動や言動を表す場合、改善のために記す場合もある。出現する語の精査を行うと、さらなる傾向がつかめることが考えられる。本研究は、介護実習日誌の学生記述に対する調査であったため、指導者のコメントは分析を行っていない。また、本研究は1つの養成校を調査対象とし、8人の実習生の実習日誌からテキストデータを収集しているため、学生数、日誌数等データに限りがある。また、実習Ⅰも比較対象として加えると新たな傾向がわかる可能性もある。上記等の理由から、本研究において分析を行った2つの実習形態は、発見できなかった特徴が存在する可能性がある。また、実習日誌の表現には、養成校の指導や実習施設の指導によりなんらかのバイアスがかかり学んだことのすべて表現していない場合がある。実習の学びの言語化分析を続けることが残された課題である。

## VI. 謝辞

本論文の作成にあたりご協力いただいた関係者の皆様に感謝いたします。

## 文 献

- 1) 厚生労働省：「平成19年度社会福祉士及び介護福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて」、[https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi\\_kaigo/seikatsuhogo/shakai-kaigo-yousei/index.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seikatsuhogo/shakai-kaigo-yousei/index.html)
- 2) 吉川直人：介護プロフェッショナルキャリア段位制度の現状と評価スケールを活用した介護実習指導の可能性。青森中央短期大学研究紀要，2018，31，129-134
- 3) 福田 明，栗栖照雄，渡邊一平，横山奈緒枝：介護実習指導者の「自信のなさ」に関する要因と改善に向けた課題の研究—面接調査結果のテキストマイニングによる分析を通して—，最新社会福祉学研究，2018，13，1-13.
- 4) 吉川直人，美濃陽介：介護実習指導に関わる介護職員の意識についての考察，青森中央短期大学研究紀要，2019，32，115-125.
- 5) 高木健志：社会福祉援助技術の視点から教授する介護実習の指導への可能性に関する一考察，川崎医療短期大学紀要，2007，27，37-40.
- 6) 宮本預羽，小嶋栄子：介護福祉学生は実習記録において何を指導されているのか，The bulletin of Nagasaki Junior College，2017，29，61-67.
- 7) 三宅真奈美，辻 真美，三宅美智子，熊谷佳余子，他：学生の視点から考える介護のやりがいとは：介護実習Ⅱを通して学んだ学生の気づきから，川崎医療短期大学紀要，2016，36，39-46.
- 8) 小車淑子，中野幹子，吉村小百合，他：介護福祉養成課程における学習成果としての実習日誌の記述向上に向けて：PDCA サイクルによる教育方法改善の取り組み，総合学術研究論集，2014，4，9-18.